

「日本留学の感想」「将来の夢」「これからの日本」

～1999年度渥美奨学生のページ～

マリア ハケウ モウラ コインブラ	「私の留学経験」	-----19
洪 京珍	「日本留学の感想」	-----19
候 延琨	「これからの日本」	-----20
具 延	「日本留学の感想」	-----21
李 鋼哲	「変わるニッポン、変わらないニッポン」	-----22
プラチャ ムシカシントーン	「将来の夢—文化も含めた自然史学の展開をタイの博物館で」	-----23
ブティ ミン チィ	「ベトナム人留学生の歴史」	-----24
王 且	「シルクロード音楽研究の感想」	-----25
楊 接期	「コンピュータ上での言語学習について」	-----26
葉 文昌	「将来の夢」	-----27
周 海燕	「将来の夢—中西医結合法による潰瘍性大腸炎の完治」	-----27

私の留学経験

マリア ハケウ モウラ コインブラ
Maria Raquel Moura Coimbra

東京水産大学 博士（資源育成学）
在ブラジル

私が、日本にやって来たのは7年前のことである。5年前の私だったなら、日本は良い国であるとしか答えることができなかっただろう。滞在3年を残した頃から私は、非常に忙しい毎日をおくることとなり、さまざまなことを勉強することとなった。日本で長期滞在の経験から母国ブラジルと日本との文化的背景の違いを感じ受け入れることができたけれども、母国の文化を否定することはなかった。

日本滞在初期、日本食に慣れることは、私にとって大きな問題であった。来日後はじめて口にしたのは、ローソンのアイスクリームであった。チョコチップ入りのアイスだと思い、口にしたのは、小豆入りアイスであった。豆を主食とするブラジル人にとって、豆は塩で味付けされるものであり、甘い豆など想像もつかない代物であった。私は、アイスの中の甘い小豆を吐き出しながら家路をたどったことを覚えている。同じ日の帰り道、一人の学生が私に話しかけてきた。“**I could pray for you. Please close your eyes.**”私は、断ることもできず、彼が私の安い傘を盗むのではないかと、片目を薄く開けて彼の私への祈りを聞いた。日本での生活の中で、再び彼の様な人と出会うことはなかったが、もう一度彼の様な人に出会ったなら、私は両目を閉じて祈りを聞くだらう。これが、私の日本滞在一日目の出来事であった。

日本の生活にも慣れはじめた寒い冬のある日、私は、スーパーマーケットにマッチ箱を買いに行った。身振り手振りで、店員にマッチが欲しいことを表現した。ふと周囲を見渡すと私と店員は、野次馬達の中にいた。

15分いや、20分かかったであろうか、店員はやっと私を理解し、私はマッチ箱がたくさん詰まった大きな箱を買うことができた。大きな箱を抱えアパートへ帰った私は、自動着火式のストーブを着けた。この頃の私をしまい込んだ大きな箱は、私の大切な宝物となった。

日本での生活が長くなるにつれて、少しずつ日本語を

理解し、コミュニケーションがとれるようになった。しかし、日本人が状況によって使い分けているあいまいな表現を理解することは難しかった。**YES**と**NO**しかない文化から来た私にとって、**YES**と答える**NO**など理解できるはずもなかった。例えば、“ちょっとむずかしい。”

“**by the group and for the group**”で決まっている日本社会は、社会レベルで自分の意見を述べるチャンスが少なかった。研究室内のことを例にとってみると学生は仕事が終わっていても、先に帰ることをしない。しかし、誰か一人が帰ると、続けて帰宅するのである。グループ社会は、先人をきって行動することを拒む特徴をもった社会であった。母国社会は周囲の意見にかかわらずそれぞれの考えをもって行動する文化的背景を持っているため、グループ社会の理解には時間がかかった。

近年、日本は世界にさまざまな影響を与え、世界を導く国の一つとなっている。しかし、日本人一人一人の国際交流の意識は、まだ高いとは言えない。例えば、母国では留学生と本国の学生寮の区別はない。しかし、日本では、留学生と日本人の寮は異なっており、国際交流において障壁となっていることは間違えない。日本人は、もっと世界に飛び出していくべきである。私は母国を遠くから眺めてみることで、母国の問題点を見つけた。井戸の中の蛙では、時間にルーズなブラジルの国民性さえ気づくことはなかったであろう。今、私は日本に来て国際性を学ぶことができたことを感謝している。

日本留学の感想

ホン ギョウジン
洪 京珍

東京工業大学 博士（化学工学）
東京工業大学化学工学研究科助手

やっと今年3月27日に博士学位取得で長い日本での留学生生活を終わりにした。嬉しい気持ちとともに懐かしい思い出で胸がいっぱいである。振り返って見ると、日本に来てから博士課程を修了するまで充実な留学生生活を過ごしたと自分自身に言えるだろう。それは日本文化

や習慣の理解、またいろいろな人と新しい学問との出会いによって可能であった。

初めて日本に来たときはすべてが大変だった。例として食事の習慣から驚きの連続であった。日本人の知り合いに招待され、家に訪ねたことがある。韓国ではご飯と味噌汁はスプーンで食べるし、ご飯と味噌汁が入っている茶碗は絶対にテーブルから離れてはいけない。日本のように手で茶碗を持って箸を使って味噌汁を飲んだら、行儀が悪いと言われる。それが20年以上も頭にあった私としては相当の習慣差であった。結局、その日は美味しそうな味噌汁は飲めなかった。ある国において禁じられていることが、他の国においては平気でありえるということに気がついた。その後、私は外国の文化や習慣は私の目で見ると、その国の人の目で見るとなった。それにより、私は異文化や習慣を自然に理解するようになった。

また、留学生活で得られた大事なことはいろいろな国の人との出会いである。私が出会った人は日本、中国、台湾、マレーシア、インド、インドネシア、フィリピン、タイ、ミャンマー、ネパール、バングラデシュなどのアジアの人を初め、米国、イギリス、ブラジル、トルゴ、スロベニア、ルーマニアなどの人まで至る。お互いに下手な日本語と英語を使って会話をしたので、時々意思伝達上において誤解も生まれた。しかし、大事なことは結局みんな同じ人間であり、国と言葉は違っても心は通じるということである。その後、私は国がどこであれ関係なく平気に人と付き合うようになった。また、それは私にとって国際的ネットワークの始まりであるとともに構成要素になった。

最後に、最も重要なことは学問の世界を広げたことである。私は学部から博士課程に至るまで専攻が少しずつ変わった。大学では微生物学科、大学院修士課程では化学環境工学、大学院博士課程では化学工学である。勿論、実際行った研究内容はそれほど変わらないが、研究の内容を解決したり、解析するときにはいろいろな分野で学んだ知識が総合的に働く。授業を受けるときには大変だったけれど、今ではそれがすごく役に立っている。このような経験から、私は新しい学問との出会いを怖がらなくなった。以上のように、日本での留学生活は私の人生にとって貴重な財産になるとともに、私が国際社会に向け

て何をすべきかを自覚させてくれた大事な期間であった。

これからの日本

こうえんこん
候延琨

東京工業大学 博士 (物理電子化学)
エール大学薬学部ポスドク研究員
(在ニューヘブレン)

日本に来てから日本人の勤勉を、仕事に対する真面目を、努力などが印象づけられた。日本民族が先進文明、真の知識についての探求、客観的な吸収、融合と発展などが、日本の経済が飛躍である深層の原因になるといえるだろう。これからの日本は国際社会、特にアジアに大きな役割を果たすことができる。アジアは人口、資源が集積されているだけではなく、地域内の経済は相互補完で、共通の文化的基盤と結びつきを持っている。地理的な隣接性と相対的に高い文化的共通性(儒教文化圏、漢字文化圏など)はアジアの国家において交流と協力を活性化させ、その相互依存性が広まる。アジア地域経済圏は、過去において世界で最も躍動的な経済成長をなし遂げ、21世紀も持続的に高度成長していくものと望まれている。アジア唯一の先進国である日本は地球的な市民の意識を広めて、アジア諸国と共生を目指して、いくつかの役割を果たさなければならない。

まず、日本がアジア全体の経済発展と生活向上につとめなければならない。日本における戦後の奇跡的な経済発展はアジアで良いモデルと認められた。アジアの国々の市場開放と経済発展に必要な資本、技術導入などを期待される。日本はアジア諸国との格差が大きいから、逆に格差を少なくする努力が必要と思う。その国々の経済の格差をできるだけ小さくするために、日本がこれからアジア地域の開発をやるべきだ。これを実現するために、日本がアジア諸国に資金援助をするほかに、先進の技術を移転することも重要である。

アジア発展途上国は経済発展につれて、環境悪化、人口爆発、資源問題が悪循環になっている。日本のような

先進国は、これらの問題に取り組んだ良い経験と先進的な技術を発展途上国に提供することが重要である。特にこのため、日本はアジア発展途上国に政府援助をすることが必要である、さらに海外ボランティアの推進やアジア諸国の人材育成に一層の努力が必要になる。その人材育成の一環として、アジアの留学生の受け入れ体制の改善は急がなければならない。

戦後の日本は平和の受益国として今日の経済繁栄を築きあげてきた。第二次世界大戦後の新しい文明や枠組みが生まれつつあり、日本が国際社会に貢献できる社会思想を目指して、積極的に努力してきた。最近の日本は国連を通じて、地域紛争や民族対立の解決、国連の平和維持活動に大きな役割を果たしてきた。平和な日本はアジア平和の実現に影響力を持つ国である。これからの日本はアジア地域内外における韓国、北朝鮮、中国と台湾、インドとパキスタン、中国と米国等敵対国の緊張緩和の調整役となれば、アジア全体の安定と繁栄をもたらすことができるだろう。

近代文明の波が、押し寄せてきているにつれて、伝統的な生活や儀式は少しずつ失われている。発展途上国の伝統的な生き方と先進国のバランスをとることはできると思う。豊かな先進国が貧しい発展途上国を援助して、近代文明を伝えるというような一方的な関係ではなく、逆に、日本人が近代文明の社会に息苦しく感じた時に、アジア諸国の人たちから、別的な生き方や社会のあり方を教えてもらうというように考えるべきではないか。また、そのために行う援助活動は発展途上国の人たちが望んでいるような援助をするべきだと思う。

日本留学の感想

具 延

筑波大学 博士（農学）
小西安株式会社

博士論文の最終審査を無事に終えてほっとした気持ちの中で、過去6年間の留学生活の道を振り返ってみると感無量でいろいろな思いが出てきました。博士学位の獲

得はもちろんのこと、心の優しい日本人との出会い、研究の面白さ、および私費留学生の辛さなどもありました。しかし、この6年間、最も印象に残ったことは、日本についての再認識および地球環境に対して日本人が優しい心を持っていることでした。

最初、日本というイメージは、高度な技術力を持つ経済大国しかありませんでした。6年前に日本人の友人から勧められて初めて日本に渡った時に、日本に留学して最先端の科学技術を学びたいという願いが留学の目的でした。しかし、1995年に筑波大学大学院に入ってから、大学で学んだものおよび工場見学で得た知見などから、日本は技術大国、経済大国だけではなく、環境保全にもかなり力を注いでいることが分かりました。このことは私に大きく影響することになり、その後の博士課程での研究内容を定める時に、環境に優しい無塩素漂白を研究テーマとすることになりました。

近年、環境問題については世界中で関心が高まっています。日本では自然環境を保護するために、十年前から製紙パルプ産業による環境汚染の実態について詳細な調査が行われました。1990年10月末に愛媛県川の江市金生川のボラからダイオキシンが検出されたことNHKが報道しました。これを契機として、パルプの漂白工程からダイオキシン、有機塩素化合物が生成されることが確認されました。それから、日本の製紙産業はパルプの漂白工程でダイオキシンが生成される分子状塩素漂白から発生の少ない二酸化塩素漂白を中心として種々の対策が取られてきました。これらの努力によって現在ではダイオキシンについては問題のないレベルになっています。しかし、有機塩素化合物の排出は完全に防ぐところまでには至っていません。紙パルプ産業においては、今後にも環境汚染のもととなる漂白工程の廃水、排気中の有機塩素化合物を減らすことが重要な課題となっています。

最近、環境に優しい漂白法として無塩素漂白の技術が製紙会社から注目されています。すなわち、従来の塩素系漂白剤のかわりに環境にやさしい酸素系漂白剤を用いることであります。また、酸素系漂白剤の中で最も多く使われているのは過酸化水素であります。しかし、過酸化水素漂白では過酸化水素の自己分解が大きな問題となっています。特にパルプ中に存在している重金属

(主にマンガンの)触媒的な過酸化水素の分解であります。一方、過酸化水素は炭水化物とほとんど反応しないために、その自己分解を抑制して反応性を高めれば、漂白性の改善が期待されます。

このような背景に基づき、私の研究は化学パルプの無塩素漂白のために、過酸化水素の自己分解を抑える方法、アルカリ性過酸化水素漂白に関する漂白の効率を高める技術、それにマンガンによる過酸化水素の触媒的な分解機構の解明を中心として研究を行いました。

大学院での5年間で、先生方の熱心な指導および日本人の友人から親切なアドバイスなどのおかげで、博士課程の研究は順調に進んできました。また、研究の結果に基づいた「アルカリパルプの無塩素漂白法」の特許を出願しました。さらに、いくつかの製紙会社はこの新しい技術に興味を持ち、実用化に向けて共同研究も行われています。その他に、私は筑波大学の特別派遣留学生としてカナダのニューブランズウィック大学大学院に留学することができ、紙の技術協会賞および大蔵省印刷局朝陽会賞を授与されたこともありました。これらはいい思い出として私の記憶に永久に残されていると思います。また、日本の大学での収穫は科学知識を学んだこと、およびすばらしい人と出会ったことばかりではなく、もっと重要なことは自分の視野を大きく広げたこと、および環境に対するやさしい心、積極的に関与する考え方が養成されたことがありました。

これから、私はこのような心を持ち、社会進歩に貢献したいと思います。

変わるニッポン、変わらないニッポン

李 鋼哲

立教大学大学院経済学研究科

私が日本に留学してもうすぐ満9年を迎える。留学としては長すぎると言われるかも知れない。しかし、私にとって、この9年間はアジア唯一の先進国である日本の社会およびその変遷について動的に観察する絶好のチャンスであった。

書物に書いている知識は留学しなくても語学能力さえあれば習得できるものである。私は来日前、北京図書館の

日本語閲覧室に頻繁に足を運び、そこで日本の哲学、労働運動、政治などに関する書籍をたくさん読み、日本に関する一般知識と専門知識を相当身につけていた。その上、当時は北京にいる日本人との付き合いも随分あったので、私の日本観はある程度形成されていた。しかし、いざ日本に来て見ると、現実の社会は私が考えていたイメージとは大きなギャップが見られた。やはり、一つの社会を知るためには身を持って洞察してみることが不可欠なことであることを深く感じた。

さて、この20世紀の最後の10年間は、東西冷戦体制の崩壊とともに、世界にとって急激な変化を体験した重要な時期であったが、日本にとってはどうであったのか。日本の何が違って、また何が変わっていないのだろうか。一言で言うことは難しいが、あえて言えば、「静止状態が続く中で変化の兆しも見える」というフレーズで表現できるだろう。

まず、社会の現実を見ると、それまで奇跡的な急成長を見せていた経済は、バブルのはじけによって停滞し、GDPの伸び率はほぼ停止状態を続けている。したがって、サラリーマンの所得水準と生活水準はほとんど上がっていない。その「お陰で」海外からの留学生を支えていた多くの民間財団も影を潜めたため、奨学金の受給者の数は大幅に減り、留学生数も計画の10万人には至らず、5万人台で殆ど増えていないのが現実である。

しかし、日本の政治には大きな変化も見られた。戦後数十年間続いた自民党一党政治体制は崩れ、多党間の混戦状態が続いている。また、経済領域では、日本の産業構造は激しく変化し、多くの製造業がアジア近隣を中心に海外へ進出し、日本企業のアジア化が大きく進展し、「脱欧入亜」現象が起こっている。国内ではコンピュータ分野をはじめIT産業が急速に市場を拡大しているが、その反面に製造業の海外進出に伴い失業率が急上昇し、史上最悪の4.5%に達した。国内の消費が落ち込んでいるために景気回復はなかなか進まない。これからの日本社会の変化を支えるものとして、90年代にインターネット時代が幕を開け、利用者数が急速に増えていることが取り上げられる。そして日本は21世紀には強大な技術力をもとに大変革の時代を迎える可能性を秘めていると言えるだろう。

次に、人々の意識はどのように変わっているのか。先述の「脱欧入亜」現象は企業の行動領域では起こっているよ

うに見えるが、それはあくまでも市場の変化への企業の対応であり、日本人の意識としてはそれほど変わっていないように見受けられる。日本人がよく言う「日本とアジア」という言い方はその意識の現れではないだろうか。つまり、日本人の意識の深層には、日本はアジアのなかの国という意識は薄く、日本はいつもアジアの上にいるのである。そして、日本人が好んで使う「日米欧」という言い方も、アジアを全く意識していないようである。日本は先進国だからその比較の相手はいつも欧米であり、アジアの国ではないのである。これは、日本のアジアの仲間入りを妨げている意識上の大きな壁ではないかと私は思う。

しかし、そういう中でも日本人のアジアに対する考え方はかなり変化しているところが見える。日本に来てから、一番入りたくないが、また入らざるを得ないところがあった。法務省の入国管理局である。職員の軽蔑に満ちた顔を見たくなかったからだ。しかし、最近は職員の態度がかなり変わっており、今はあまり抵抗感がない。その背後には差別された外国人たちとそれをサポートしてくれた日本の民間団体の戦いがあったのである。日本人の外国人に対する意識も次第に変わり、共存意識が強くなっているようである。国際化に直面した日本人の意識表層の変化だと言えるだろう。

この10年間、そして21世紀は日本を取り巻くアジア諸国の大激変期になる。もし、日本がこのような変化に対応できず、いつも「アジアの上に立つ」のなら、いつかはアジアの中の真の「孤島」になってしまう。日本が本当にアジアの一員に戻れるかどうかは日本の将来を占うであろう。

将来の夢－文化も含めた自然史学の展開をタイの博物館で

ムシカシン トーン プラチャ
Mushikasinthome, Prachya

東京水産大学 博士 (資源育成)

カセサート大学水産自然史博物館学芸員兼講師

子供の頃から魚が好きだった。雨期になると、洪水とともにやってくるキノポリウオや雷魚の仲間たちを、バンコクの街中で追い掛け回していた。そんな子供時代を

過ごした私は、長じて魚類学を専攻した。博士課程の研究テーマとしては「タイワンドジョウ属魚類 (雷魚の仲間) の分類学」を選び、インドから中国まで9カ国を旅し、フィールドワークを行ったが、それは本来の研究の成果とは別に貴重な体験をもたらしてくれた。

インドでアッサムと並び例外的に熱帯雨林気候を呈するケララ州のコタヤムを旅した時、その東南アジアに酷似した景観、気候そして人々の気質に驚愕した。アジアを広く旅して得たものの一つは人間の文化も自然環境によって育まれたものであるということへの実感であった。現在、私達が文化と呼んでいるものは長い間の人間と人間、人間と環境 (=自然) との産物であり、それらは複雑に絡み合い、変遷を経て現在私達が目にしている形に到達している。自然そのものを知り、対象とする種のアイデンティティを明らかにすることを目的とする分類学は、その構造を解き明かすツールとして使えそうである。

私はこれからタイに戻り、カセサート大学水産自然史博物館のキュレーター兼講師として活動していくことになる。これからはこの博物館を拠点として、ライクワークになるであろう世界のタイワンドジョウ科魚類の分類、系統の研究を進めつつ、人と魚のかかわりについて、今まで培ってきた分類学の知識と方法を基礎とし、他分野の研究者との交流も行いながら研究していきたいと思っている。そして自分の博物館を人間や文化も含めた広い意味での自然史の研究を行う国内外の研究者が交差する「場」として機能させていきたい。自然科学の分野の研究者に限らず、社会科学の分野の研究者や一般市民にも分類学に重要性を広く知らしめるという意味で、自然史博物館の役割と責任は大きい。

タイでは世界遺産に指定されるような原生林などに比べ、開発によって急激に失われている比較的身近ないわゆる里山の自然はまったくかえりみられていないのが現状である。タイ国民の本当の意味での財産である「民俗」はむしろ後者を場として発展してきたといえるのにもかかわらず、このような状態にあるのは自然にかかわるタイの民俗の研究が継続的に行われず、体系化されてこなかったことも大きな原因と考えられる。民俗文化が失われる前に記載、研究することは急務である。こうした憂慮すべき状況は他の東南アジアの近隣諸国で

もほとんど変わらないようである。

自国の自然そして文化の個性を知り体系化していくことは、急速な発展を遂げつつあるアジア全体にとって非常に重要なことであると信じている。お互いの国の文化、自然を相対的に評価することを可能にするからである。

子供の頃私を育ててくれた魚のいる豊かなランドスケープ。それはタイ人のアイデンティティを形成するのに必要不可欠であると、私は今、深く感じている。

ベトナム人留学生の歴史

フ ティ ミン チ
Vu Thi Minh Chi

一橋大学 博士 (教育社会学)
一橋大学客員研究員 (在ハノイ)

たぶん外国に行った人は誰も皆、自分より先にこの土地に足を踏んだ同国の人がいるのか、もしいれば誰なのかという疑問をもったことがあるでしょう。

私も10年前に、初めて日本に来たとき、先輩たちとりわけベトナム人留学生の一番最初の世代に興味をもって調べてみました。そして2年目の時、ベトナム語の教え子が「池袋近くに100年前のベトナム人留学生のお墓がある」と教えてくれました。それを耳にいれた日に、授業が終わったあと、私はベトナム語の学習者4人と、さっそくその教え子の案内を受け、池袋駅の近くにあった雑司ヶ谷墓地に向いました。しかし、墓地が広くて、その留学生のお墓がどこにあるかわかりませんでした。雑司ヶ谷墓地の事務所の当日の担当者にもわからなかったのが、暗くなるまで探しましたが、結局見つけられないまま帰らざるを得ませんでした。その後も教え子は何度も雑司ヶ谷墓地にいつ探しましたが、見つけられなかったということを知っていますし、勉強も忙しかったが、そのお墓や留学生についての興味は私の頭から消えることはありませんでした。

去年、10年間の留学生活がやっと無事に終了し、私は帰国する前にどうしてもそのお墓にお参りしたいと思いました。お墓の写真があった本を手に入れた私は、

再度昔の教え子と二人で本を持ちながら雑司ヶ谷墓地に行きました。そして今度は幸運が来てくれました。墓地の事務所の担当者を訪ねたとたん「ああ、チャン・ドン・フォンのお墓でしょう」という返事がありました。案内してくれた通りに、私たちは石で出来ている立派なお墓が多くある中で事務所のすぐ裏にあったコンクリートの寂しそうな一つのお墓を見つけました。

お墓のなかに眠っている留学生は、ベトナムにおける1905年「東遊」という独立のための日本留学運動に呼応して東京に来た留学生200人のうちの一人であり、陳東風(チャン・ドン・フォン)という人でした。当時ベトナムはフランスの植民地であったが、日露戦争で勝利した日本は植民地支配下にあったアジアにとって大きな励みでした。そこで、自国の独立のために日本の援助を求め、日本へ留学しようとしたベトナム青年たちは、フランス政権に見つけられれば自分が死刑され、家族も厳罰を受けるなどの危険を覚悟したうえ、香港経由で、清国の留学生として東京に向かい留学をはじめました。

しかし、1907年に結んだ「日仏協定」によって、日本政府はフランスに協力してベトナム留学生を追放しました。一方、フランス植民地政権によって、国内の家庭が送ってくれた留学の資金源が閉ざされてしまいました。裕福な家庭で生まれた風さんは、困っていた留学生たちにお金を出して助けてください、と父に手紙を書きました。しかし、フランスの圧力のためか、返事の手紙が来なかったのも、風さんは自分の死をもって父を説得しようと思ひ込み、自殺してしまいました。わずか21歳でした。

話は90年も前のことでした。彼の死はベトナム人留学生の歴史に、なんと悲しい開始を与えました。しかし、歴史は繰り返さないでしょう。彼に比べれば今の私たち留学生は数百倍も幸せでしょう。ベトナム人留学生として正々堂々と来日し、国費留学生は言うまでもなく生活が十分保証され、私費留学生もさまざまな奨学財団に恵まれ、留学に専念することができるからです。そして、このような恵まれた条件の中で成功した人は少なくなかったのです。

夕焼けに染まったお墓の前で手を合わせ、「先輩お休みなさい。私たちは後輩として先輩が行きつけなかった

道を歩き続けています。先輩のかなえられなかった願いを必ず実現させてあげましょう。ベトナムは必ずどの国にも負けずに立派な国になるでしょう」と語りかけました。私の言いたいことは彼に届いたことでしょう。

シルクロード音楽研究の感想

ワン ダン
王 旦

東京芸術大学大学院博士後期課程

シルクロード（絲綢之路または絹の道）の起点、西安（昔の長安）生まれの筆者が、西安を出発してシルクロードを西へ、新疆までの旅をしたのは**1987**年の事である。中学校の地理の授業でシルクロードについて学んで以来、この西域の地には夢をかきたてられてきた。**1987**年と**88**年、念願かない自分の足でシルクロードの新疆まで歩く事ができた。**90**年には新疆のタジク自治県のタシクルガンに達して長年の夢であったタジク族とウイグル族の音楽に接することができた。**1993**年と**94**年の二度に分け東欧諸国及びギリシア、エジプト、トルコへの研究旅行を行った。また新疆へは**1997**年に四度目、**1998**年に五度目、**1999**年に六度目の訪問をした。

中国、中央アジア、西アジア及び東欧のこの広大なユーラシアの回廊で、音楽文化圏は、鎖の輪のように連なり、交錯しあっている。そしてまた文化圏のそれぞれの境界周辺の地域では、相互間の近親性、関連性が著しい。さらに、民族の大移動によって同じ質の音楽文化が遠隔地にまで伝えられた例も非常に多い。例えば五音音階の西への流れや、上述触れた各地域に存在する「マカーム」である。筆者の研究は、ヴァイオリン音楽とマカームのつながりである。つまりマカームの影響を受けたヴァイオリン音楽の研究である。しかし、ヴァイオリン音楽とマカームの関連について論じたものは、筆者の知る限りまだ見当たらない。この研究は、非常に意義のある研究と筆者が感じている。

多民族が集中している中国西北部はユーラシア大陸の回廊とも呼ばれる。各民族のシルクロードを通じての往来は高度な西域文化を生みだした。一方、イスラム教

の中央アジア進出は、シルクロード（旧ソ連中央アジア諸共和国、中国の新疆ウイグル自治区を含む）さらに東欧の一部も含め独特のイスラム音楽文化圏をつくりだした。

新疆ウイグル自治区は中国の文化、インドの文化、ペルシアの文化、アラブの文化、ギリシアとローマの文化が交じり合っている。シルクロードの音楽を研究するには、中央アジアに位置する新疆は大変興味深い地域である。新疆は歴史的にいわゆる世界の三大文明と三大宗教の融合地であり、同時に各種言語と人種の融合地でもある。この中央アジアの音楽をあきらかにするのは非常に難しい課題と考えられ、筆者は出来るだけこれらの「微小音程」を含むマカーム旋法や音階に見られるその近似性、及び互いの関連する面において研究を進めた。実際はヴァイオリン音楽作品の中にマカームは存在している。シルクロード沿線のヴァイオリン音楽は、なんらかの形でマカームあるいはマカームから派生したものの影響を受けていると筆者には思われる。筆者の故郷西安に古くから伝わる民族劇音楽『秦腔』を素材としたヴァイオリン音楽の旋法は、西アジアなどに普遍的に存在しているマカームの『ラスト』中の微小音程（ $1/4$ ほどの音程）と同じ音程が使用されている（G、A、B↓、C、D、E、F↑、Gの旋法）。これは昔シルクロードの東と西の国々及び各民族の間で音楽文化の交流がなされた結果と考えられる。

筆者の博士論文の結論として中国（漢族、ウイグル族、タジク族）、中央アジア、西アジア及び東ヨーロッパのヴァイオリン音楽を通じて、この地域の伝統音楽の旋法的要素とりわけマカームの影響を強く受けた事実を明らかにした。

各民族間の音楽の近似性を探求していくためには、隣接する諸民族の民族音楽についての正確な知識がなければならない。筆者としてはヴァイオリン音楽とマカームの関連は大変意味の深いテーマだと考えている。マカームの影響を受けている多民族の国である中国は、各民族の魅力的な音楽の宝庫であり、無限の研究テーマを与えてくれることだろう。これからも、今まで研究してきた道に沿って勉強を続け、理解を深めていきたい。できれば、このシルクロード沿線の音楽、特にヴァイオリン音楽や作品を研究、紹介することをしたい。これはシル

クロード出身の筆者の使命であるとさえ考えている。

コンピュータ上での言語学習について

楊 接期

東京工業大学 博士 (教育工学)
国立中央大学情報工学研究科研究員
在台北

長いような短いような 6 年間の留学生活はどうとうこの春でピリオドを打ちました。感想はたくさんありますが、以下、自分の研究を中心として紹介しながら、感想を述べさせていただきたいと思います。

私は、第二言語学習の立場として、日本語学習支援システムの構築に関する研究を行っています。主として、インターネット上で日本語を自由に学習できる環境の構築です。古くから言語学習に関する様々な方法が開発されてきました。しかし、学習の目的によって行われる方法も異なるので、どちらの方法が学習者にとって最良であるかどうかを断言することが難しいです。逆に言えば、学習の目的によって、その目的に合う学習方法を考えなければなりません。例えば、読み書き能力を目的とする場合、文法や構文のパターンを効率的に学習できる方法が優先的に選ばれます。一方、会話を目的とする場合、コミュニケーション能力を高める方法が望ましい。

10 数年前から、コンピュータが言語学習に用いられるようになりました。近年、コンピュータの普及、インターネットの急激な発展、自然言語処理技術の進歩などの要因に伴い、コンピュータ上(特にインターネット上)での言語学習が盛んになりました。時間と空間の制限を越え、随時にコンピュータをアクセスすることができること、また、学習者の学習履歴を細かく記録でき、学習者や教師に学習診断の指標になることがその魅力と利点と言えます。これらは、伝統的な学習方法では実現することが難しいです。

もちろん、反対する意見もあります。例えば、コンピ

ュータが人間のように感情を持たないから冷たく感じること、コンピュータが学習者の入力に対して 100 パーセント判断できない誤解析が生じること、などの指摘がありました。これらは、現在のコンピュータや自然言語処理技術の限界ですが、将来改善の余地があると思われます。仮に、限界があるとしても、それを最小限にして、コンピュータの能力を如何に発揮することが研究課題です。

カセットテープのように、コンピュータは、あくまでも言語学習のためのメディアです。しかし、なぜ他のメディアに比べて言語学習に大きなインパクトを与えているのでしょうか。これは、コンピュータは単にメディアとして言語学習に用いられるだけでなく、学習方法や学習スタイルそのものに大きく影響するからです。コンピュータを利用することによって、言語学習の効率を高めることが期待されます。特に、最近成熟する自然言語処理及び音声処理の技術のおかげで、言語の 4 つの技能(聞く、話す、読む、書く)を総合的に学習できる環境になってきています。

しかし、言語学習にはコンピュータだけで充分であるかどうか疑問です。仮に完璧なコンピュータが存在し、人間同士の対話のようにコミュニケーションが取れるとしても、果たしてそれは真のコミュニケーションと言えるのでしょうか。現実では、そのような状況までは当分の時間がかかりそうです。現在、コンピュータ技術の限界を超えるためには、コンピュータを補助する立場として捉え、技術だけでなく人間を介する「ヒューマン・マシン・インタラクティブ」なアプローチが取られています。

以上、これまで自分の研究に関する「コンピュータ上での言語学習」を紹介しながら、自分の感想を述べました。将来、機械翻訳の進歩によって、他の言語を母国語に素早く翻訳することができて、まったく他の言語を学習する必要性がなくなるかもしれません。しかし、効率的、楽しく、気軽に学習できる語学環境の構築は私の夢として、将来研究しつづけるエネルギーの源です。

将来の夢

よう ぶんしやう
葉 文昌

東京工業大学大学院理工学研究科

来日して、9年が経過した。のべ9年の高等教育である。来日当初はもちろんこんなに長く居残るとは思っていなかった。大学4年時に研究室に配属されて「ものづくり」を初めて以来、その楽しさについつい最終学歴の博士課程にまで来てしまったという感がある。来日当初の夢が「日本の優れたものづくり」を学ぶことと「人情ある国」への留学であれば、30才までのこれまでの人生はおよその目標は達成できたことになり、経済面では相変わらず一文なしの学生ではあるものの内心、充実感に満ちてとても満足している。

それではこれからはどのような夢を持つのか？私の夢を語ると、早い話が単なる「ものづくり」である。なぜまたものづくりなのかというと、やはりものづくりが世界一の国に留学したからで、更にそれは、人類の生活を向上させるには欠かせないものと考えたからである。またそれを活かさなくては、日本留学の意味が半減するのである。では日本のものづくりがどう優れていて、それがなぜ必要なのか？

ここ数年、アメリカ経済は絶好調である。これは90年代に新たに創出された情報産業によるところが大きいと思う。新しいものを創出するのは彼らが強いところである。しかしだからと言って、ものづくりは必要ないと言う訳ではない。あらゆるものの最終製品は形のあるもので、それが人間と接するのである。そんな所で日本の強さが見える。これは繊細できれいな好きな民族特性の上に、現場を重んじる風潮から、使う側からものづくりができるからだと思っている。例えば、米地下鉄の販券機は鉄の塊で、おつりを取るのにわざわざしゃがまないといけない。また自動改札では、前に隔たる鉄の棒を押して進む。これが私にはあまり好きになれない。これは単なるエンジニアリングでしかない。一方で日本の改札では、自動的にドアが開くだけでなく、最近では無接触カードの開発も進められている。この人間が使うこと

に配慮してものづくりをしているところに温かさを感じる。家電や情報機器もそうである。優れた機能から世界の家電は日本ブランドが圧倒している。情報機器については、かつて日本の閉鎖性ゆえに世界一の機会を逸した感があるが、最近では薄型ノートや、音声映像などマンマシンインターフェイスとしての要求を多めに満たした機器を開発し、強さを発揮しつつある。私は新産業創出による需要が一段落すると、機能性やデザインなど人間との関わりを重んじたものづくりが必要となると思っている。情報産業のハードについて言えば今がちょうどその時期でそれは日本企業が強いところであり、それゆえに将来、ものづくりを温存した日本企業はこの分野で再び強さを取り戻すと信じている。

以上のことから、ものづくりはこれからも重要で、それは日本に留学した最大の収穫の一つであると思っている。台湾で最近活躍している世代ではアメリカ留学が圧倒的に多く、それ故にアメリカナイズされた思想を持つ。台湾を発展させるためには、新しいものを創出するアメリカ型思想とそれを使う人間に受け入れてもらう工夫をする日本型思想が同時に必要となるであろう。後者は残念ながら、これからの台湾の足りない部分である。私はこれからの30年間、自分の日本でのものづくりの経験を生かして台湾に貢献できる部分で貢献することを夢とした。たとえそれが微々たるものであろうと。願うところは30年間、台湾が環境を配慮しながらも、経済やテクノロジー…あらゆる面で更に発展を続け、地球村にとってなくてはならない存在となることである。そして周囲の国々の人が集まる、魅力のある国へと化すことを願っている。

将来の夢

— 中西医結合法による潰瘍性大腸炎の完治

しゅう かいえん
周 海燕

東京医科歯科大学 博士 (医学)

北京中医薬大学日本分校助教授

今の私は自分の心を落ち着かせながら本文を書いて

おります。本来、今日の教授会で自分の博士号が決められるはずだったが、主査の先生がご出張のため、つぎの教授会まで延期されることになりました。これを聞いて、さすがに肩を落としました。“まさに **Murphy's Law** だ！”と思いました。心が穏やかではいられない状態でありながら将来の夢の構図を乱さないように努めております。

“夢を持って誇り高きに人生を送ってください”と言われたことがあります。私にとっては心に響いたお言葉であります。“いつでも自分の夢を忘れずに頑張らなくちゃ”と自分自身に言い聞かせました。

さて、将来の夢を語りましょう。“もう夢を見る年齢ではないでしょう”と言われるかもしれませんが、中西医结合(中国伝統医学いわゆる東洋医学と西洋医学との融合)による潰瘍性大腸炎の完治という夢こそ私の生き甲斐であります。

医学の道を選んだ理由は朦朧としていましたが、たどり着こうとしたら、おそらく幼いころ体の弱かった私をつれて病院に通った母の願望だったかもしれません。優しい先生に見てもらった時、母はあなたも大きくなったらこういう人の心を大切にできる優しい医者になったらいいなとつぶやいた時のことはいまでも覚えております。当時本当はまだ中医と西医の区別もよくわかりませんでした。ただイメージとして中医の先生は優しくそうな顔で脈を取って下さった、その時の先生の姿が眼にやきついていたのであるかもしれません。一旦入学して勉強を始めたら中医の深奥さにこんな優しさが潜んでいるのかと心が動かされました。一方、世間の中医に対する偏見の風にも向かわざるを得なかった。最初はそういった偏見の中で心の動揺があって、コンプレックスを感じたこともありました。臨床に携わっている間に西洋医学と東洋医学のそれぞれのメリットとその限度を教えられました。西医と中医がお互いに対立するのではなく、両方の優れたところを取り組んで、融合させた医学——中西医结合こそ医学のあるべき姿であろうと信じて中西医结合の道を歩み始めました。実際に取り組んだのは難治疾患である潰瘍性大腸炎の治療でした。研究結果は中西医结合法が97%の有効率を示し、中医或いは

西洋医の単独療法よりかなり優れていることが明らかになりました。しかし、中国で中西医结合法を提唱されるようになってからまだ30年足らず、いまだに如何にうまく融合させるかは大きな課題として残されています。潰瘍性大腸炎の再発が解決されておらず、完治できる方法もいまだに開発されていません。そこで中国に閉じこもって暗中模索するよりも、外へ出たらもっともっと本当の姿がみえてくるのではないかと思いたちました。第一歩は日本への留学でした。日本の潰瘍性大腸炎に対する優れた診断技術及び西洋医学の治療法に感心するばかりでした。一方ステロイド剤の副作用で苦しんでいる患者さんを見て、思わず漢方薬の併用を提案しましたが、漢方薬の作用機序に裏付けが取れているものが少ないため患者さんが自ら要求しないかぎり応用できませんと教えられました。そのことは私の大学院での研究テーマに取り組んだきっかけとなりました。より多くの患者さんに応用されるために欠かせないことだと思いました。今の段階での研究結果は画期的とは言えないかもしれませんが、自分にとっては喜ばしいものでした。少なくとも夢の実現には一歩近付いたと信じております。その間、私はより多くの研究者との交流を図るため、ドイツ及びオーストラリアの国際学会に出席して研究成果を発表いたしました。そこでも欧米諸国での東洋医学に対する認識の浅さを実感し、歯がゆい思いをしながらもこれからの肩の荷の重さを自覚いたしました。世界での中西医结合の普及は決して容易のことではなからうが、夢を持って誇り高く生きてゆくことこそ中西医结合に欠かせない私の人生訓となりました。どんなことがあってもこの信念を貫くため一歩一歩堅実にしっかりと大地を踏んで頑張っていくつもりでおります。

すこしでも私の訴えたいことがわかっていただけたでしょうか。今の私の心は穏やかになっております。